

戴季陶の日本留学

(東京大学教養学部非常勤講師) 張 玉萍

〔要旨〕

本稿は、近代中国知識人の日本留学の経験と日本観の形成との関係について、戴季陶を取り上げて検討するものである。戴が多くの留日経験者の中でもとりわけ卓越した日本認識を獲得し得た基礎には、少年時代以来の特異な経歴と、留学経験があったと考えられる。そこで、戴の日本との邂逅、日本語能力の習得、日本大学での勉学、退学の原因などを考察した上で、それらが帰国後の彼の日本観にどのような影響を与えたのかを、関連史料、特に日本大学の史料を参照しながら検討する。それによって彼の日本認識の形成過程を可能なかぎり明らかにした上で、日本は彼にとってどのような存在であり、日本留学経験が彼の人生及び日本観の形成にどのような役割を果たしたのかを浮き彫りにする。

I. はじめに

近代中国における留日知識人の日本観を検討する場合に、留学経験と日本観との関係は軽視・無視される傾向がある。留日経験がなければ、彼等の日本観が形成されることもなかったろう。そして、留日経験と日本観は、彼等が帰国後に人生の進路を決定する上で一定の役割を果たし、それによって中国政治や文化などに影響を及ぼすことになった場合も、少なくないと思われる。故に、彼等の日本観を研究する際には、それが形成された過程に注目することが必要不可欠であろう。帰国後の政治的立場から解釈することでは、彼等がどのような個人的経験によって、どのような思想を持ち、さらにどのような行動をとったのかという、各個人の内的必然性を無視することになってしまうからである。

本稿では数多くの留日学生の中で、後に『日本論』等を著した著名な知日家である、戴季陶(1891～1949年)を取り上げる。彼は後に孫文の機密秘書兼日本語通訳として側近の一人となり、

中国国民党史上に名を知られた有力政治家である。彼の日本観は同時代の中国人の対日認識に大きな影響を与え、国民党政権の樹立・強化及び対日政策の決定に力を発揮した。また、彼は日本を通してマルクス主義の中国への紹介や三民主義の儒教的解釈など、多彩な政治活動を行った人物でもある。従来からその思想や行動は注目を集めていたが、国共両党間の対立や融和に応じて、政治的なレッテルを貼られたため、後世の評価は大きく揺れ動いてきた。

戴季陶の日本観について、従来の研究の多くは彼の後年の日本観に注目している⁽¹⁾。少年時代の教養及び日本留学については、伝記の中で簡単に紹介された程度で、これまでの研究ではあまり注目されることがなかった。若き戴季陶が日本に渡り、生活・勉学などを通して日本人・日本文化と大量・直接に接触したことや、史上初の「留学熱」という現象が戴の日本観形成に及ぼした影響は、十分に検討されてきていない。戴の日本観を検討する場合、彼がどのように日本と邂逅し、どのように日本と接したのかという問題は、決定的

に重要である。なぜなら、彼が自身の日本認識を確立し得た基礎には、少年時代以来の特異な経歴と、留学経験があったと考えられるからである。後に国民党の理論家となった戴は生涯浩瀚な文章を残したが、自分の留学経験について、あまり詳しい記述を残していないことが、研究がほとんど見られない理由であろう。しかし、彼の日本での留学生活を分析することで、なぜ後年詳述することがなかったのか、その原因についてある程度の答えを見出すことができると思われる。

戴季陶が卓越した日本語能力を持っていたことは周知の通りであるが、しかし彼は一体どのようにその日本語能力を身に付けたのか、少年期の国学の勉強方法が日本語学習においてどのように生かされたのか。また、日本大学で法学を勉強したことはよく知られているが、どのような状況で何を勉強したか、なぜ、卒業する前に退学・帰国してしまったのか、またそのことは帰国後の彼の日本観にどのような影響を与えたのか、それらに関する研究は管見の限りない。そこで、本稿では上記の問題意識に基づき、関連史料、特に日本大学の史料を参照しながら検討したい。それによって彼の日本認識の形成過程を可能なかぎり明らかにした上で、日本は彼にとってどのような存在であり、日本留学経験が、彼の人生及び日本観の形成にどのような役割を果たしたのかを浮き彫りにしたい。

Ⅱ. 戴季陶流の日本語学習法⁽²⁾

1. 日本との邂逅

戴季陶は、1891年1月6日に四川省の漢州（成都の北、現在の広漢）に生まれ、名は伝賢、字は選堂・季陶、晩号は孝園であり、散紅、天仇、泣民など多くのペンネームや法名を用いている。戴季陶は2-3才から祖父に教育を受け、『幼学瓊林』『唐詩和解』『詩品』や四書を学び、5才の時に数百首の唐詩を覚えた。6才で塾に入り、四書

を始めとする書籍を暗誦し、その意味をほぼ理解でき、当時、親戚や近隣の人々によく「神童」と讃えられたという⁽³⁾。9才までに五経を熟読し、袁了凡の『綱鑑』や『通鑑輯覽』を読んだ。その後、塾を開いた長兄伝薪に厳しく教育された。9才で『春秋左氏伝』を学んだ時は、毎朝3篇約3000字を暗誦し、午前中は史書を読み、午後は経伝の約100文字の書き取りをし、少しでも間違えると、体罰を受けるという厳しさであった。夜になると、『古文観止』『古文辞類纂』『文選』を教材に古文を勉強した。毎月经書を1冊読み終え、月末に全部を暗誦した。こうして、1900年2月から11月までに『左伝』を読み終わり、年末に3日間をかけて長兄に暗誦して聞かせた。6才からの4-5年間『詩』『書』『易』『礼記』を勉強した。また、長兄の指導の下で『列国変通興盛紀』『泰西新史』などの新書を暗誦し、自然科学の方面においても数学を勉強し、天文地理などの書物を読んだ⁽⁴⁾。1901年、童試を受けた戴は、県試と府試で好成績を収めたものの、院試で『易経』からとった「為大赤」という題を理解できず失敗した。

以上のように、戴季陶は幼い時期から中国の伝統的教育を厳しく受けて、かなりの教養を身に付けた。後に彼が孫文の三民主義を儒学と結びつけて新たな解釈を行ったことや、国民革命期以後完全な儒家的な風貌の持ち主になったことも、この時期に受けた教育と関わっている。さらに重要なのは、中国の古典を暗記するという伝統的な学習方法が、後に日本語の学習に当たって重要な役割を果たしたことである。科举による昇進に失敗したことは、彼の人生における最初の挫折だったが、結果としてこれが彼を新たな方向に向かわせたのである。

1902年、11才の戴季陶は東游予備学校に入り、新式教育を受けるようになった。戴はここで日本語を勉強する他、長兄伝薪の親友だった東文学堂の日本教習（日本人教師）服部操からも個人的に

日本語を教わった。服部は特別に戴季陶のための教育法を編成し、文法・会話・精読を一緒に教えた。また、戴は服部を通じて他の日本人とも接触し、日本語で交流した。このように11-12才という最も外国語の習得に有利な時期に、戴季陶は相当程度の日本語力を身に付けたのである。

1903年、戴季陶は12才の若さで優れた文章力を校長に認められ、成都客籍学堂高等科に入学した。ここで彼の学業は大いに進歩した。中国が益々衰退するのを見て、同級生である湖南の沈明漢、陝西の梅少和など4人と義兄弟の契を結び、清朝政府を倒すことを誓ったという。これは自発的なものであり、外からの運動の結果ではなく、世の中に革命党があることも知らなかった。また、『北米戦史』を読み、「軍に従ふの勞にして且つ苦なるを聞かず、但だ熱血を黄土に濺がんと願う。只手にて奴隸の雲を撥ひ開き、双手にて革命の鼓を撃ち起こさん」という「北米少年歌」を作り、周囲の人を驚かせた⁽⁵⁾。

翌年、道員出身の新校長が四川省政界の有力者に取り入るため、この学校に在学していたその人物の息子や甥の成績評定を特別に優遇した。試験の成績がいつも上位であった戴は、校長の不正によりその順位に影響を受けた。それに反発した戴は朔望（陰暦1日と15日）に孔子を祭る講堂の扁額に「某氏宗祠」と書き、新校長が学校を私物化していることを風刺する意を示した。それに激怒した校長は他の教師や生徒の反対にもかかわらず戴を退学させ、その上、教師の尊厳を理由に四川全省の学校に戴を入学させてはいけないという通知を出した。このことは13才の戴にとって大きな打撃となった。その後、彼は兄の助けで、名を変えて華英学堂に入ったが、3ヶ月で当局に知られ、また退学させられ、「本当に身の置き所のない学生」になってしまった⁽⁶⁾。この出来事が、彼の日本留学の一因となったのである。

二度も勉学の機会を失ったことにより苦境に陥

った戴季陶は、小西三七という日本教習に助けられた。通省師範学校の教師であった小西は、成都客籍学堂の物理・化学の教師でもあった。戴季陶の聡明さ、特に日本語で会話できることは、小西に深い印象を与え、二人の間の親交が始まったのである。戴季陶が退学させられた時、小西は戴を書斎に泊まらせ、物理・化学を教えた。後、川北中学校の理科の教師となった小西は、戴を自分の正式な通訳にした。これにより自信を持った戴は、日本留学の志が強くなり、1905年、断髪して、恩師小西の反対にもかかわらず、日本留学の道を選んだ⁽⁷⁾。

このように、戴季陶も最初は中国の伝統的な科挙の道に進もうとしたが、童試受験の失敗によって、新式教育を受けるようになった。中国にいた時から戴季陶は日本語を勉強し、日本人と接触したことによって、日本文化をある程度知り、進んだ近代文明を持つ日本に憧れていたと思われる。戴が東游予備学校に入って、新学を学び始めたところまでは、大多数の留日学生の経歴と同じである。しかし、退学させられ苦境に陥った彼を救ってくれたのは日本人教員であり、この教師に従って新学の学習を続け、日本に対して好感を持ったと考えられる。当時の社会状況として、科挙が廃止され、また日露戦争に日本が勝利したことにより、中国人の日本留学ブームが起こったことが挙げられる。さらに戴個人としては四川省内の学校で新学を学ぶ道が絶たれたため、また自分の個人的成功を図る上で、日本という存在が欠くことのできないものとなり、日本留学の道を選んだと思われる。

2. 来日後の所属

1905年、中国史上初の留学熱の最盛期に戴季陶は東京に着き、留學生活が始まった。後に長い間戴の秘書を務めた陳天錫が著した年譜によると、最初の2年間に彼はある師範学校で勉強したとい

う。戴自身は後年、清末の中国では法政学校と師範学校を創設することが盛んであったと述べている。また「当時、日本の私立学校の中で最も中国人留学生の心理に適合していたのは、法政と師範という2種類の学校だけだ」と語っており⁽⁸⁾、そのうちの師範を選んだことになるが、史料の制約により、具体的にどの師範学校なのかは分からない。

なお、戴は後年、「日本の陸軍士官学校に留学した時、総統〔蒋介石〕と一緒にあった」と述べている。陳天錫は、陸軍士官学校は振武学校の誤りであり、またこれに関してそれまでの伝記などに記載されておらず、修正して再版の時に訂正すべきであると言っている。一方、中国第二歴史檔案館編『蒋介石年譜初稿』によると、蔣は1907年春から1909年冬まで振武学校で留学とあり、これによって黎潔華、虞葦、久保純太郎は、戴が振武学校にも入ったと説く⁽⁹⁾。しかし、振武学校は日本が清政府のために設立した陸軍人材を育てる軍事学校であり、清政府は自費生が陸軍を学ぶことを禁じたので、私費で日本へ留学に来た戴にとっては、入るのが不可能だったはずである。ちなみに蒋介石は1906年4月に私費で軍事を学ぶために日本へ留学に来たが、中国陸軍部の保証・推薦が必須なので軍事学校に入れず、同年冬に帰国するまで清華学校で日本語を勉強した。1907年夏に中国の保定通国陸軍促成学堂（後の保定軍校）に入り、1908年3月にやっと公費留学生として振武学校に入学し、1910年11月に卒業して、新潟県高田の野戦砲兵第19連隊士官候補生になった⁽¹⁰⁾。従って、1907年秋に日本大学に入るまでの一時期、戴が振武学校にも在学したとは考えられない。なぜ戴本人が陸軍士官学校に入ったと言っているのか、史料がないため不明だが、恐らく自分は蒋介石といかに早くから交流し、親しい関係を持っているかをアピールしたかったのではないかと思われる。

戴がどの師範学校でどのような授業を受けたの

かは分からないので、当時の中国人留学生の一般状況を簡単に紹介することで彼の留学事情を類推することにしたい。当時の多くの留日学生が受けた教育の特徴は、教育内容が専門学でなく普通学だったこと、及び正式の教育ではなく速成教育だったということである⁽¹¹⁾。普通学は旧制中学校程度の諸学科であり、専門の学に対して言う。彼等が学んだのは日本語以外に、数学、物理、化学、医学、農学、法学、軍事などの学科で、その程度は低く中学校或いは小学校レベルであり、日本の歴史、地理、文化などには関心が払われなかった。速成教育では修業期間は長くとも1年半程度であり、中には8ヶ月、6ヶ月の速成師範科などが置かれ、通訳付で教えているところもあった⁽¹²⁾。

以上のように、戴季陶は来日後ある師範学校に入り、恐らく当時の一般的な留学生と同じくまず普通学を学んだのであろう。なぜなら、来日時にさほど普通学の基礎を持っていなかった戴は、そのような勉強をしなければ日本大学に入るための基礎能力を身に付けられなかったはずである。ただし、進学する場合に何より重視されているのは、日本語能力である。また後に戴が政治家となる出発点は孫文の日本語通訳を務めたことにあり、留学中に日本語をどのように勉強したか、また何を考えていたのか、検討する必要があるだろう。来日前、すでに日本語を流暢に話せたが、果たしてそれは日本での勉強に十分であったのだろうか。

3. 「口と耳は実に目より重要である」⁽¹³⁾

日本に来た時の戴季陶の日本語能力は、どの程度のものであったろうか。彼によると、「会話・聴講するにはそれ程困難はなかったが、その会話と聴講はまず意識的に中国語に訳して、それから日本語の意味を理解せねばならなかった。話す時の最初の考えと聴く時の最後の理解は中国語に頼り、日本語で直接できなかったため、授業のペースに間に合わないことがしばしばあった」。つま

り、戴の思考回路はまだ中国語であった。また、「特に助詞及び動詞・形容詞の語尾変化が中国語にはないので、それらを記憶・運用するのは難しかった」ということである。即ち、中国で通訳ができたほどの彼の日本語能力も、来日後に完全な日本語の環境に身を置くと、まだ自由自在に使えるレベルではなかった。

そこで、ある言語学の教師から外国語学習法を教わった。つまり、新聞の社説及び小説各1編を毎朝完全に読み、理解できるかどうかを気にせず、知らない単語があつたら、暇があるなら辞書を調べ、無ければしなくてもよい。ただ、「読む時は必ず声を出し、発音は極めて日本人を真似なければならない」ということであつた。

戴はこの方法を実行し続けた。その結果、第一段階では、目・口さらに耳を慣れさせた。「少し苦勞を感じ」ても、「読み通して意味が理解できなくても」、多読・熟読し続けて、徐々に「目や口、さらに耳も慣れてきた」ということである。留学期間中、戴は中国語の書籍を読んだことがなかったというから、意識的に完全に日本語のみの環境に身を置き、日本語を体感するように努力したと言えるであろう。

第二段階では、読解力を高めた。彼は「読んで」と同時に、理解もできるようになった。半年後、他人が音読しているのを聞く度に、すぐ理解できるようになり、考える必要がなくなった。それによって、読み・書き・聴く・話す能力がすべて十分な水準に達した」という。以上の特訓方法は現在でもよく使われる方法である。しかし次のやり方は、当時及び現在の中国人留学生の中でも珍しいのではないと思われる。

第三段階では、「蘆花の『自然と人生』の1冊を全部熟読・暗誦し、兼好法師の『徒然草』、紫式部の『枕之草紙』〔清少納言の『枕草子』の誤り——以下、〔〕は、引用者による補注を表わす〕、また謡曲の中から簡明、優雅な文章を数編

読み、合わせて近古の詩文を10冊近く完全に暗誦できるように努めた。幼い時期国語に「官話、傍点は引用者」を学んだのと同じ方法である」と戴は回顧している。前述した少年期に身に付けた古典中国語の能力は、古典日本語の学習に最大限に役立ったと考えられる。

言語の中で音声の重要性について、戴は次のように強調している。「言語・文字の勉強は熟読・多読の両者が必要である。読むということは、語調・内容を声で工夫を凝らして表現しなければならない。その効果の素晴らしさは、実に言葉で表現できない」。また、「文字は一つの極めて自然な芸術であり、言語〔語音〕は極めて自然な音楽である。韻文でも散文でも、雅語、俗語は皆それぞれ音節、調子があり、しかも文法、文章のあやの中に自然に存在している。少しでも聡明な人なら熟読するだけで、その文章の意味を自ら理解できる」。そして、戴は言葉の勉強が「口と耳は実に目より重要である」と結論づけている。

こうして、戴の日本語のレベルは十分に上達し、彼の同級生でまた親友でもあつた謝健や、宮崎寅蔵と萱野長知など多くの人達に高く評価されるまでになった。高い評価を得た一例を挙げると、1914年『国家及国家学』第2巻第5号に戴が投稿した、「国家精神より見たる支那」に関する記者の紹介文には、戴が「能文達識、盛名海の東西に洽し、而も氏は日本語を能くし、(中略)言文一致を以てする日本文の、如何に老熟なるかを見よ」と書かれている⁽⁴⁾。そして、留学中に「散紅生」という筆名で日本の新聞・雑誌に、小説・詩・随筆を発表し、彼の文章は日本人よりも優れていると言われた。しかし、それらの文章は散逸し、今日では残っていないという⁽⁵⁾。なお、当時の多くの留日学生は戴のように勤勉に日本語を学んだわけではなかった。例えば、湖南蜂起の失敗により1904年12月に来日した宋教仁は、日本到着の2ヶ月後にやっと日本語学校に入り、25日後に

は登校しなくなったが、日本語ができないと不便であるためか、2ヶ月後には再び登校するようになった。しかし、日本語あるいは日本文化を特に力を入れて学んだことはなかった。また、1906年に来日した周作人は当初日本語学校に入ったが、週3、4回しか学校に行かず、そこで習得した日本語は自分にとって役に立たなかったと、自ら語っている⁶⁶⁾。

このように、来日後の戴季陶が他の留学生より遥かに徹底的に日本語を訓練し、優れた日本語能力を身に付けたことは、注目に値する。日本語の新聞を毎日読む習慣は戴の日本語を上達させたのみならず、新聞を読むことに慣れさせ、社会情勢に対する関心を高め、また新聞記事の書き方をも次第に身に付けさせ、後に優れた新聞記者になる基礎となった。それによって帰国後に政治にかぎらず経済・文学・社会・宗教など、幅広く優れた作品を著すことができた。また、日本の政治・経済・社会・歴史・文化・風俗など、多方面にわたる知識を得たことにより、中国語で日本を理解するのではなく、日本語で日本について深く認識・理解することができた。

また、戴は自分を意識的に完全に日本語のみの環境に置き、工夫を凝らして多読・熟読し、物事を吸収しようとした。幼少期に「国語」を学んだ経験や身に付けた国学の素養が彼の日本語の学習、さらに日本古典の学習のために重要な基礎的能力となった。戴が中国古典について徹底的に訓練した学習方法を生かして、日本の古典を学んだことも、日本文化について興味を示さなかった多くの留日学生と、極めて対照的である。それによって後年『日本論』等の著作で日本の建国理念、日本人の精神構造まで追究する土台が作られた。

Ⅲ. 日本大学での勉学

1. 日本大学での所属——専門部法律科

1907年夏、戴季陶は師範学校を卒業し、秋に松

岡康毅が学長を務めていた日本大学に入学し、「戴良弼」という名で登録した。字は季陶であった。1907年11月30日の『学部奏定日本官立高等学校收容学生名額摺』によると、「近年来、臣らは日本で留学している人数を詳しく調査した。一万人を越えたにも拘らず、速成教育を受けている者が60%、普通学を学んでいる者が30%、途中で退学し転々と何もできなかった者が5、6%を占めている。高等及び高等専門学校に入学した者は3、4%、大学に入学したのは僅か1%しかなかった」⁶⁷⁾。これに従うならば大学に入学した1%の中に戴季陶は属したことになる。

日本大学の前身は、1889年に司法大臣の山田顕義伯爵により設立された日本法律学校である。設立目的は、「我邦に日本法学なるものを振起し、以て国家盛運の万一を増進せんと欲するなり」であった。1903年8月、「今般本校ノ事業ヲ拡張スルコトニ決シ、文部省ノ認可ヲ経テ大学組織ニ変更シ、校名ヲ日本大学ト改メ」たのである。1904年4月、専門学校令に依拠して私立日本大学として文部省から正式に認可された。ただし、日本大学は1920年に発布された大学令からすると旧制の大学組織である。本来は高等の専門学校であったが、大学予科及び大学部を設けることによって大学と称することが認められたわけである。この大学では法律学、政治学、経済学、商業学、文学等の学術を教授し、大学部、大学予科、専門部、高等専攻科、高等師範部、大学部商科付属植民科、大学付属外国語専修部が設置されている⁶⁸⁾。

戴の日本大学での所属について、年譜や伝記及びその他の先行研究は、ただ日本大学法科に入学したと記述しているが、当時の日本大学には、大学部法律科、専門部法律科などがあったものの、「法科」という名称はなかった。東京大震災及び大空襲により、当時の資料が焼けてしまったので、戴の所属に関する一次資料は存在しない。ただし戴の親友である謝健は回顧録において戴と

「同学〔同級生〕」「同系〔同学部〕」「同郷〔同じ出身地〕」であり、楊子鴻とは「同学」「同系」だと記している²³⁾。そして、興亜院政務部『日本留学中華民国人名調』が収録する、専門部法律科の卒業生名簿には、謝健・楊子鴻の名が載っていることから、戴は専門部法律科の学生だったと考えられる²⁴⁾。

戴が在学していた専門部法律科は日本法律学校の本科を元に発展したもので、日本大学となってもその中核として財政的に全学園を支えていた。特に判事、検事、弁護士など多数の人材を育て、日本大学法律科として世間の注目を集めていた。専門部にはまた正科、特科があるが、入学資格から見ると、正科は大学予科の正科と同様であり、即ち中学校又は師範学校卒業生であった。特科の入学資格は、①中学校に準ずる学校を卒業したる者、②小学校本科教員の免状を有する者、③文官普通試験又は之と同等以上の試験に及第したる者、④裁判所書記試験に及第したる者、となっている²⁵⁾。戴が正科生だったか特科生だったかは分からないが、当時中国人留学生が日本の中学校に正式に入学することは考えられないので、恐らく師範学校卒業生の資格で正科に入ったのではないと思われる。

では、大学部と専門部にはどのような違いがあったのであろうか。大学部にはまた正科・特科・選科があったが、いずれにしても大学予科の正科・特科・選科のそれぞれの修了者であることが要求されている。また、大学予科生は専門部法律科生と同じ入学資格であり、互いに転じたり、兼ねたりすることもできる。従って、大学部法律科は専門部法律科より一つ上のランクに位置し、現在の大学学部により近いのであろう。しかも、大学部法律科は卒業生に日本大学法学士の称号を認可したが、専門部法律科には同様の規定がない。ただし、当時大学部には学生数が少なく、あたかも専門部の付属的存在であり、日本大学のみなら

ず、各大学共に経営を支えていたのは専門部であったという²⁶⁾。

2. 履修の基本

(1) 学習の期間・時間

専門部法律科に入った戴季陶の学習期間・時間はどのくらいだったのか、試験や学費及び学習内容はどのようなものだったのか、検討してみよう。1906年1月に改正された私立日本大学学則によると、全部の講義は満3年で終了し、各部各科の講義は毎年4月に始まる。また各自志望の科目につき随意に聴講することができる。大学部、専門部は1科目につき二つ以上の講座を設け、学生がその一つを選択して聴講する。1年間の聴講科目は六つ以上とする。聴講時に学生は係員に聴講券を提示すべきことが定められている。専門部の授業は、毎日午後4時（土曜日は午後1時）に始まる。休業日は日曜日、大祭日、3月18日から4月7日、7月11日から9月10日、12月20日から翌年1月12日である²⁷⁾。戴の在学中に学則が新たに定められたり改訂されたりはしていないので、戴は基本的にこの学則に従って勉学したと考えられる。

この学則から、戴は、毎年4月に授業が始まり、1年間6科目以上の授業を選択し、毎日午後4時以後（土曜日は午後1時）に大学で受講し、春、夏、冬期に三つ長期休暇があり、3年間在学することが可能であったと判る²⁸⁾。つまり、日中にはかなりの自由時間があり、他の中国人留学生との活動や日本人及び他国人との交流・社交が可能であったと考えられる。

(2) 試験・学費について

日本大学では、学生は3年間在学すると卒業試験を受けられる。ただし、入学の際に入学試験を9科目以上受けて合格した者は在学2年間、16科目以上を受けて合格した者は在学1年間で卒業試験を受けることができた²⁹⁾。3年間在学したことから、戴は普通入学であったことが推測できる。ど

のような科目を受験したかは分からないが、9科目以上の入学試験は彼ら留日学生にとって至難であったろう。参考として、専門部特科入学希望者は先述した資格がない場合、国語（作文）、漢文（白文訓点）、数学（四則・分数・比例）の入学試験に及第し、年齢が満17才以上であれば入学を許可する規定があった²⁸⁾。国語、漢文がかなりの割合を占めていることから、正科も同じであったと考えられる。従って、先述した戴の古典を含む日本語の特訓は、入学試験において効果を表したであろう。

さらに、卒業試験は毎年3月、6月、12月の3回行われ、そのうち1科目又は数科目を選び、数回に分けて受験することができた。また、試験の合格点は「毎科五十点以上」であり、学費については「束脩金貳円」であるが、「貧困にして篤学の者と認むるときは特に授業料を免ずることあるべし」と定められている。その外、後述する特待生や貸費生の制度もあった²⁹⁾。卒業試験は年3回もあり、また授業料免除の制度や特待生、貸費生制度が設けられたことは、貧困であるが勉学に励む学生に希望を与える措置であった。

表 専門部法律科課程表

始講及 終講 科目	自四月一日至 翌年三月三十一日	自四月一日至 翌年三月三十一日	自四月一日至 翌年三月三十一日
憲法	全部		
刑法	総則	各論	
行政法			全部
民法	総則法 物権編自第一章至第六章 親族編	物権編自第七章至第十章 債権編	相続編
商法		自第一編至第三編	第四編以下破産法
民事訴訟法		第一編	第二編以下
刑事訴訟法	自第一編至第三編	第四編以下	
国際公法		全部	
国際私法			全部
経済学	全部		
財政学			全部
法学通論	全部		
羅馬法	全部		

備考：一、羅馬法、法学通論は之を省き、又は随意科目と成すことあるべし。

二、本表の外擬律擬判、法学実習、警察監獄学、法理学、論理学、外国語（英、独、仏の内）等の一科目若くは数科目を加へ又は之を随意科目と為すことあるべし。

出所：『日本大学九十年史』上巻、日本大学、1982年、318～319頁。

(3) 学習内容

戴は専門部法律科で何を学んだのか。以下の科目から選択して学習した可能性があると思われる。

学科目：憲法、刑法、行政法、民法、商法、民事訴訟法、刑事訴訟法、国際公法、国際私法、経済学、財政学、法学通論、羅馬法³⁰⁾。

なお、1906年の学則によると、専門部法律科課程表は表の通りである。

戴が入学した1907年、日本大学専門部法律科では、笈克彦・美濃部達吉・寺尾享・戸水寛人（全員東京帝国大学法科大学教授、法学博士）など、著名な学者が教鞭を取っていた。彼らの担当授業は、笈克彦（憲法・法学通論）、美濃部達吉（行政法汎論）、寺尾享（国際公法）、戸水寛人（羅馬法）であった³¹⁾。法学を専攻した戴が具体的にどの授業を受けたのかは、一次資料が残っていないので考証できないが、これらの教員の授業科目から選択し、指導を受けたのであろう。なかでも――後述するが、笈克彦は戴にとって印象深い存在であった。

3. 笈克彦の神権思想及び戴季陶への影響³²⁾

笈克彦（1872～1961年）は長野県出身で、東京帝国大学法科を卒業し、ドイツ留学を経て帰国後、1900年に同大学教授となり、憲法学・法理学・行政法を専攻した。後に国学院の教授となり、法学博士、公法学者、神道思想家でもあった。1904年に法政大学清国留学生法政速成科が成立すると、兼任教授となった。彼は中国の歴史的脈絡の中で開明専制論を論じたことにより、陳天華、汪兆銘、胡漢民などの中国人留学生に、多大な影響を与えた。1905年には『民報』と『新民叢報』の論争において、革命派と立憲派の双方が彼の法学理論を使って論戦したという³³⁾。このことから、笈は同様に日本大学の中国人留学生にも相当な影響を与えたと考えられる。彼は古典

神学の研究で名を上げ、「神ながらの道」を唱導し、神道的国家主義を主張したため、「かなながら（神道）憲法学派」ともよばれる。彼は古神道・仏教の研究を経て、天皇の神格を信じ、現人神である万世一系の天皇が治める大日本帝国が人類世界を統一し、支配するのが当然であることを説き、国家主義の立場に立つ憲法学者として、第二次世界大戦前には軍部、右翼の理論的支柱として活躍した³³。

寛は大学で授業を行う時、その最初と最後に目を閉じて手を合わせ、自分の幻想の中にいる「祖先神」に敬意を表わしたという。直接に寛の授業を受けた戴は、神権思想に関する感性的認識を得たと考えられる。戴季陶は1927年に書いた『日本論』の中で寛について、「この人は、学問の点では極めて広く、かつ深かった。しかも、私たちが憲法学の講義を受けた頃、彼の思想は極めて進歩的だった。私自身は、思想的に彼から多くのものを学んだ。その頃の彼の法理論は、法文ばかり重視して理論を軽視する当時の日本の法学界において、明らかに革命的色彩を帯びているものであった」と描写している³⁴。

戴は『日本論』の中で日本人の「信仰力」を賞賛しているが、それは、砂のように団結力のない一般の中国人はともかく、少なくとも先知先覚たる国民党員は三民主義を一つの信仰として固く信じるべきだと主張するためであった。日本人の国民的信仰は戴によると、即ち「天皇先祖神天」に対する「絶対的な尊重・信仰・畏服」である。彼は「日本の統治階級の宗教は神教」であり、日本民族思想の中心は神権であり、日本人の国体観念は神権の民族思想に由来し、神権思想とは即ち「神選民族」「神造国家」「君主神権」といった考え方だと指摘している³⁵。

実際には、日本国民が共通の信仰を持っていることに戴季陶が最初に注目したのは、『日本論』を書いた時ではなく、それ以前の討袁運動期であ

った³⁶。その後、五・四運動期にはその信仰が軍国主義を生み出したと批判したが、国民革命期に入ると日本人の国体観念は神権の民族思想に由来し、神権思想は日本建国の基礎だと評価するようになった。

戴の神権思想についての認識は、後年彼の中国の建国理念——三民主義で中国を統一すること——にまで影響を与えた。即ち、日本人は共通の信仰を持つことにより全国民が一丸となり、近代化を成就できたと認識した戴は、中国人も一つの共通の信仰を持つことができれば、それが国の発達に結びつくと考えたのである。その場合の共通の信仰の内実は言うまでもなく日本の神権思想ではなく、孫文の三民主義である。従って、孫文の死後、戴季陶は三民主義を国家イデオロギーのレベルにまで引き上げようと努めたのである。共産主義というもう一つのイデオロギーが中国で威力を発揮するようになると、戴らはそれを徹底的に消滅させないわけにはいかなかった。

これらは後年のことであるが、やがて経済的原因でやむをえず帰国し、蘇州の江蘇地方自治公所の教習になった際には、日本大学で学んだ法学の知識が戴にとって生計を維持する手段となった。1909年12月に、法学の知識をいかして書かれた「憲法綱要」は彼が最初に行った講義の講義録である³⁷。その中で、戴は国際的視野を以て国家と法律の要義について論じ、国法については特に寛克彦の説を紹介し、自分の説明を付して述べている。1910年8月に書いた「『憲法大綱』私議」では、日本の憲法の特徴を始め、英・仏・独等の憲法を比較しながら、手本にするべきものを検討し、中国の『憲法大綱』の是非を逐条的に論じている³⁸。また1921年、孫文が広州で中華民国政府を樹立した際に戴季陶は、憲法草案と「商会法」「工会法」「工場法」「産業協作社法」「各種社団条例」の起草の仕事を与えられた。戴は各国の法律文献を集めて分析し、数万字の法律草案を完成させた³⁹。

さらに南京国民政府が成立すると、立法院院長胡漢民に請われ、戴は立法院顧問として民法総則・債権・物権という三編の立法原則の確立及び各編の全部の条文の起草について多大な力を尽した³⁹⁾。中華民国の重要な法律の制定には、戴季陶の思想と意志が含まれていると言える。彼は民国立法史上において重要な位置を占めているが、その理論の基礎はこの時期に築かれたのである。

このように14才から18才までという人生の中で感受性の最も強い時期に、進んだ知識を吸収する目的で、戴季陶は4年間の日本留学生生活を送った。前述した通り優れた日本語能力を持つようになっただけでなく、法学という専門知識を身に付けたことにより、近代中国における法律の設定に大きな力を発揮した。また神道憲法学者である筧克彦の授業を受けたことにより、後年日本の歴史の中から日本建国の理念、日本の民族性の根源などを見出す基礎が得られた。ところが、これほど熱心に勉学に励んだ戴は意外にも、卒業する前に退学・帰国してしまったのである。その理由は一体どのようなものであろうか。

IV. 日本留学の中断

1. 不本意な退学

戴季陶は日本大学に入って、同じ四川省出身の謝健・金鋭新（工手学校学生）及び湖南省出身の楊子鴻と親友となり、「松濱四友」と称した。彼と金鋭新が住んだ麴町の松濱館は専ら日本人客向けで、中国人留学生をあまり歓迎しなかった⁴⁰⁾。戴と金は二人とも流暢な日本語を話すことができ、また戴が常に新聞・雑誌に詩や小説を発表していたので、旅館の主人はこの優秀な若い中国大学生に感服し、特別に住ませたのである。当時の留日学生には、数人が共同で一軒屋を借りて女中を雇う者もいたが、専ら中国人同士で接触し、日本社会に積極的に入らなかった。それとは異なり、戴は日本人向けの旅館を下宿にし、主人と親

しく交わり、そこに出入りする多くの日本人と接触する機会を得ていたのである。従って、日本の庶民と直接に接触し、日本の国民性を草の根の次元から理解するという経験が、戴の後の日本観形成に大きな役割を果たしたのである。

日本の旅館は、一般的に食事と宿泊の費用を合わせて計算し、食事以外の煙草、マッチ、切手などの費用は皆旅館に一時的に立替えられ、月末に勘定する。しかし、松濱館の主人は戴の才能を好み、宿泊費以外には他の費用をそれ程厳しく計算しなかった⁴¹⁾。

日本へ渡る際に、30畝の祖田を売って得た700元を留学費用にした戴は、安全のためその金を二つに分け、500元を懷に置き、200元を手にとっていた籠の底に入れたが、四川から船で漢口に到着したばかりの時に強盗に遭遇し、籠を奪われてしまった。悲しんで慟哭した戴は、同姓の友人に慰められて日本に来る。しかし、数年後に戴は経済的に余裕が無くなり、実家からの送金もないため、常に友人から金を借りたり援助を得たりしていた。松濱館の主人はその中の一人であり、戴は主人に小遣いを常に借りていた。しかも、その後他人の債務を返済するためにも主人からの借金に頼った。二人の仲は良く、深く交流していたと思われる。しかし、時間が経つと共に、高額の借金を主人に返却することができなくなる。3年生になると、益々経済的に難しくなり、学費でさえも金鋭新の家からの送金で立替払いをしてもらっていた。この時、松濱館の主人も経済的に苦しくなり、期日を限定して戴に借金の返済を催促した。戴は他の方法がなく、退学することを考えざるを得なくなった。そして、帰国の旅費さえも、親友の謝健が妻の指輪と大学の講義ノートを質入れして得た金に頼ったのである。このように、経済的に苦しんでいた戴は、住んでいた旅館の家賃も払えず、とうとう卒業する前に退学し、帰国せざるをえなくなった。18才の戴は慟哭して親友と別

れ、1909年夏に極めて遺憾の意を残して、日本を後にした。

故に、日本大学の卒業名簿には彼の名が見られない。但し、興亜院政務部が編集し、1940年に出版した『日本留学中華民国人名調』の中で、推薦校友として「戴天仇」の名が載っている(629頁)。これは、前述した私立日本大学学則総則第4条「卒業証書を有する者は終身本大学の校友とす」という規定に反しているようである⁽⁴³⁾。しかし、日本大学校友会規則第五条によると、「令聞ある人は特に請ふて本会名誉会員と為す事あるべし」という規定があったので⁽⁴⁴⁾、恐らく戴が帰国した後、中華民国の政治・文化特に対日外交に大きな影響を持つ著名人になったことから、名簿に取り上げられたのであろう。不本意ながらも退学した原因は経済難であると一般的に言われているが、本当に卒業したければ、まことに聡明な戴にとって、果たして救済の措置は全くなかったのであろうか。

2. 特待生、貸費生、休学などの措置

「学術優等品行方正なる学生」に対して、日本大学学則第48条では臨時試験を通して「特待生」にし、「賞品を与へ若くは一年以内授業料を免除」し、また第49条は、「学費支弁の途なき者は之を貸費生として年額二百円貸与することあるべし」と定めている。さらに、第45、46条には、「五ヶ月以上在籍し授業料完納の者にして疾病其他止むを得ざる事故に依り満六ヶ月以上修学すること能はざるときは本大学の許可を受け一年以内休学することを得」「休学中は授業料を納むることを要せず」とある⁽⁴⁵⁾。特待生、貸費生、休学といった措置はいずれも、窮迫の学生に有益な救済方法であるが、戴がこれらを申請しなかったのか、あるいは申請しても許可されなかったのか、さらにこれらの制度は留学生向けではなかったのかは不明だが、経済的理由で不本意ながらも退学せざるを

得なかったことから、戴はこれらの優待を受けなかったことがわかる。また前述したように、年3回卒業試験を行い、学生は科目を選択し、数回に分けて受験することができた。同級生の謝健が3ヶ月早く1909年に卒業できたにもかかわらず⁽⁴⁶⁾、戴は結果的に不本意なままで帰国してしまったことは事実である。

一方、当時、留日学生は日本を通して西洋文明を中国人に紹介する使命を背負い、大量の翻訳活動、雑誌出版活動を行った。例えば、宋教仁は神経衰弱症にかかったにも関わらず、来日半年後には神田工芸学堂で中国語を教えたり、1年後には『日本憲法』『露国之革命』『英国制度要覧』『各国警察制度』等、大量の書籍を翻訳することで報酬を得た⁽⁴⁷⁾。宋より日本語がさらに上手な戴は翻訳活動に参加していなかったようである。また、よく各新聞に投稿し日本人作家と原稿料を競ったともいわれるが⁽⁴⁸⁾、それはあくまでも一時的な収入且つ小額であり、生活費や学費に充てることはできなかったろう。

以上のように、特待生・貸費生・休学、また試験を受けて早期に卒業すること、さらに翻訳や執筆活動を通して報酬を得ることなど幾つかの救済の措置があったにもかかわらず、戴はいずれの手段も採らなかったのである。彼が帰国にまで追い込まれたのは単純な経済難ではなく、何か精神的な打撃によって、異国での勉学を支えていく力が失われたのではなかろうかと思われる。それは一体どのようなことであろうか。

3. 精神的な打撃——初恋の困惑

師範学校の時に戴季陶は派遣されて来日していた山西省出身の王用賓と知り合い、後に日本大学の同級生となった。王は1905年の中国同盟会設立の際、孫文に直接加盟を請い、高く評価された。彼の紹介によって同盟会に加盟した山西省出身者は100人を越えた⁽⁴⁹⁾。戴は王を通じて多くの革命

党員と知り合い、孫文及び中国同盟会のことを知った。1905年7月13日に、1300人の中国人留日学生が主催した孫文歓迎大会に参加し、初めて孫文の演説を聞き、孫は革命家であり偉大な人物であると認識したという⁶⁰。しかし、戴は留学の間、ほとんど政治活動に参加しなかった。その原因は政治活動に従事していた者の内、少なからざる人々が見識は浅薄、品性は軽薄であると感じたためであるという⁶¹。

戴は中国人留学生の政治活動と距離を置いたものの、1908年に日本大学中国人留学生学友会の組織活動には積極的に参加した。当時、日本大学には1000人以上の中国人留学生在いたが、まとまった組織がなかった。中国人同士で交流しやすくするために学友会を設立しようと、戴と楊子鴻、胡霖などが検討した。学生が団体を組織して革命を宣伝し、清朝を打倒することを防ぐため、これに反対した当時の駐日留学生監督の田景昭と交渉したり、経費を調達したり、戴は先頭に立って組織の成立をめざした。成立大会の際には、日本の文部省と清国公使館から代表が派遣され、日本大学の松岡学長と大部分の教授も出席し、大学内外の留学生は2000人以上にも達したという程の、空前の盛況であった。大会で17才の戴は主席に選ばれ、成都方言と流暢な日本語で開会式の挨拶をし、その能力を最大限に発揮した。最後に、戴は日本大学中国人留学生学友会会長、謝健は書記に選ばれた。普段から感情の起伏の激しい戴は、哀楽を問わず泣く習慣がある。この日も松濱館に帰った後、感動して慟哭したという⁶²。

戴は留学生団体設立のために活躍し、そのリーダーとなったことより、他の団体と接触する機会も増え、注目されるようになったと考えられる。その中で特筆したいのは、朝鮮人留学生との交流活動である。1908年10月25日に、在東京朝鮮人留学生団体の中心人物であり、1920年代末に三均主義を掲げて朝鮮独立を主張した趙素昂（当時明治

大学法学部在学）と知り合った。趙は戴の文才を「大才」だと高く評価し、特別に戴を訪れたこともある⁶³。また、政治犯として日本に亡命し、国のために苦心して活動していた僧侶の金永基と交流し、詩を贈られた⁶⁴。戴は日本にいる韓国人を「義を為すために頗る勇気を持っている。国事のために奔走し、一身の利害を全く計らない」と高く評価している⁶⁵。韓国人に対してこのような認識を持った戴は朝鮮人留学生との交流を積極的に行い、彼らにある程度の好感を持ったと考えられる。そこで、彼の留学生活のみならず、全人生にまで大きな影響を与えた事件が生じたのである。

謝健の回想によると、戴は朝鮮復国の志士と交友し、李という女子留学生と知り合った。彼女は李王の叔父の娘であった。朝鮮人留日学生の内、数多くの愛国の革命志士が日本帝国主義と闘っていたが、日本政府は朝鮮を植民地にするために朝鮮人学生を厳しく監視し、行動の自由を制限した。韓国併合直前に東京に留学していた王族という身分の人物であれば、日本にとって政治的な利用価値は高く、その行動が無視されることはなかったろう。戴は李との交際を最初は秘密にしたが、その後深く愛し合う二人は婚約し、婚約披露の宴会を行った。戴は宴会で日本の歌を歌い、謝健は故郷の川劇「叫花子排朝」を歌い、在席者は皆心から祝福した。最後に、非常に感動した戴は「人生の遇合は、此くの如きに過ぎず」と語り、また慟哭した。ところが、数日後に李は突然行方不明になった。彼女は「政治的な関係で脅迫されたようで、すぐに交際は絶たれてしまった」と、謝健は回顧している。幸福に包まれていた戴はこの突然の打撃を受け、完全に意気消沈し、異国での純粋な初恋は政治の犠牲になってしまったと思われる。以後、戴はこの事についてほとんど口にせず、知っている人も極めて少なかったという⁶⁶。ただ1926年、戴は、「私は世界の革命家とかなり交流し、世界各国の革命事情を常に注視しているが、

朝鮮の革命に対して特別に関心を持っている。これは私が初めて婚約した相手が韓国人だったからであろう」と語っている⁶⁶⁾。17年の歳月を経ても、まだ彼はこのことを銘記していたのである。

異国での純粋な婚約がこのような形で失敗したことが、18才という青春期の戴に与えた打撃がどれほど大きかったかは、想像に難くないであろう。それにより、情熱的な性格の持ち主であった彼が意気消沈し、異国で努力し続けていく力を喪失してしまったのではないか。またこのことが、戴が日本に失望し、反発するようになる一因だったのではないかと考えられる。帰国後の辛亥革命期において、彼には留学した国への特別な親しみの感情が全く見られず、むしろ終始、当時の多くの留日学生と同じく中国の立場から「敵」として日本を分析し、批判しているのである。彼の日本像はかつて憧れを抱き、人生の中で最も重要な人格形成期を過ごした理想の国——「第二の故郷」から⁶⁷⁾、中国の直面する「第一の強敵」へと変化し、「日本敵視論」を抱くようになった⁶⁸⁾。

以上のように、日本で新知識を学んでいた戴は経済難のために卒業する前に退学し、帰国せざるを得なかった。特待生・貸費生・休学、早期卒業、さらに翻訳や執筆活動を通して報酬を得ることなど幾つかの救済の措置があったのに、彼はどれも採らなかった。留学中、戴は中国人留學生学友会の組織に積極的に参加し、大学側及び清国公使館と直接に接触し、組織能力を鍛えた。それによって韓国人との交流が増えて、日本以外の国の人々との交流ができ、第三国の視点を持ち日本と中国を観察することもできた。しかし、朝鮮王族の李との婚約の失敗は、青年期の戴に非常に大きな精神的な打撃を与え、異国での勉学を続けていく力が失われたのであろう。またこの屈辱は、生涯浩瀚な文章を残した戴が、自分の留学経験について、あまり詳述しなかった理由であろうと思われる。

V. おわりに

以上、戴季陶流の日本語学習、来日後の所属、日本大学専門部法律科における学習の状況・内容・影響、さらに日本での留學生活、退学・帰国の原因などについて検討し、彼の日本認識の形成過程を可能なかぎり明らかにしてきた。ここでは、日本が彼にとってどのような存在であり、日本留学の経験が、彼の人生及び日本観の形成にどのような役割を果たしたのかをまとめることにする。

彼は伝統的な中国知識人の昇進への道である科挙に失敗したため、日本留学の予備校に入った。また予備校を退学処分になった際には、日本人教師に助けられ、日本の進んだ近代文明に憧れるようになった。そこで、日本留学こそが唯一の教育・出世の機会であると認識したため、必然的に早くから日本に対して強い関心を持っていた。そして、彼は最も感受性の強い時期に日本に渡り、新聞記事を中心に日本語を熟読・多読し、幼少期に「国語」を学んだ経験や身に付けた国学の素養を生かして、日本古典の学習を進めた。拔群の日本語力をいかして専攻の法学の勉学に励み、日本社会の様々な面に深く接触したことは彼の日本理解の基礎となった。帰国後、戴は孫文の日本語通訳となったことから、日本専門家として国民党内の重鎮となり、政界での昇進を遂げた。また法学の知識を以て後に中華民国の重要な法律の制定に力を発揮し、民国立法史上において重要な位置を占めている。さらに笈克彦から神権思想に関する感性的認識を得て、後年国民的信仰の重要性を見出し、三民主義が一つの信仰として国家理念となるべきことを唱えたのである。総じて言えば、日本は彼の生涯を通じて、個人的な成功を得るために極めて重要な意味を持つ存在であり、日本留学経験はそれを可能にした出発点であった。

しかし、戴は李との婚約の失敗により、18才の若さで国際政治の狭間に立ち、精神的に大きな打

撃を受け、退学・帰国した。またそのことが、後の日本観にも影響を与えた、即ち、日本帝国主義の残酷さ、植民地化された朝鮮の悲惨さ、そして「唇が減れば歯が寒い」という中国の存亡の危機を、自らの経験により切実に感じたと思われる。帰国後、彼は国際情勢に関心を持ち、日本に併合された朝鮮に同情し、朝鮮独立運動に積極的に協力した⁵⁹⁾。彼が最初に発表した文章は、まさに日韓併合の性質と中国存亡との関係を論じた、「日韓合邦與中国之關係」である⁶⁰⁾。留学中に身につけた国際的知見をいかし、国際的な視野で日中関係を分析するようになったのである。

人格形成期に戴は一介の学生として、日本人と庶民レベルの交流をもったことにより、日本に関する実体験に基づく認識を強めた。4年間の留學生活の中で喜怒哀楽を経験した戴にとって、この「日本」は時には彼の救い主であり、時には彼を見捨てる存在であった。この時期の経験がなければ、後年の日本に対する深い理解にまでは至らなかったであろう。総じていえば、苦楽半々の留學経験をした戴は、日本人の文化・民族性をその内側から総合的に認識し、日本人の価値観を把握・表現する基礎を、この時期に築いたのである。

[注]

(1)代表的な先行研究は、以下のものがある。初期について：桑兵・黃毅「辛亥時期戴季陶的日本観」（胡春恵主編『「近代中国与亜洲」學術討論會論文集』香港珠海書院亜洲研究中心，1995年。望月敏弘「戴季陶の初期の日本認識について——辛亥革命前後から日本亡命時期を中心に」（小島朋之・家近亮子編『歴史の中の中国政治』勁草書房，1999年。張玉萍「辛亥期における戴季陶の日本認識——1909～1912年」『中国研究月報』第610号，1998年12月。同「討袁運動期における戴季陶の日本認識——1913～1916年」『近きに在りて』第36号，1999年12月。

同「護法運動期における戴季陶の日本観——1917～1918年」『歴史学研究』総第811号，2006年2月。国民革命期について：森永優子「近代中国の対日観——戴季陶の『日本論』と戴季陶主義に関する一考察」『史観』第93冊，1976年3月。深町英夫「中国人の民族意識と日本——戴季陶の『日本論』」『歴史と未来』第20号，1994年。望月敏弘「中国国民党の対日観」宇野重昭・天兒慧編『20世紀の中国——政治変動と国際契機』東京大学出版会，1994年。董世奎「戴季陶『日本論』の構造および文体」『中国研究月報』第670号，2003年12月。全時期について：李朝津「戴季陶的日本観的変遷」胡春恵編『「近代中国与亜洲」學術討論會論文集』上，香港珠海書院亜洲研究中心，1995年。賀淵「戴季陶的日本観——1913～1931」梅屋庄吉関係資料研究会編『近代日中関係史研究の課題と方法——梅屋庄吉とその時代』報告集，1999年。嵯峨隆『戴季陶の対日観と中国革命』東方書店，2003年。

(2)戴季陶の日本との邂逅について、少年期の科挙（童試）受験に失敗したのと直接に関係し、また国学の学習方法が後に日本語の勉強にも生かされたことから、国学の素養について紹介する必要があると思われるが、伝記などに詳細な記述があるので、本稿では必要な部分のみ簡単にまとめるに止める。特に断らない限り、戴の経歴は陳天錫『戴季陶先生編年伝記』中華叢書委員会印行，1958年，範小方・包東波・李絹麗『国民党理論家戴季陶』河南人民出版社，1992年，黎潔華・虞葦『戴季陶伝』広東人民出版社，2003年，に基づくものである。なお、年は満年齢で記されている。

(3)戴季陶「記少時事」1944年中秋節10日前，陳天錫編『戴季陶先生文存』第2巻，中国国民党中央委員会，1959年，599頁。

(4)戴季陶「余之読書記」1933年3月，前掲『戴季

- 陶先生文存』第2巻, 543～544頁。
- (5) 戴季陶「珠璣砂磔」『天鐸報』1911年1月6日, 唐文權・桑兵編『戴季陶辛亥文集』上冊, 中文大学出版社, 1991年, 440頁。
- (6) 前掲「余之読書記」542, 547頁。
- (7) 同上, 547頁。
- (8) 戴季陶「怎樣建設法学的基礎講詞」1928年11月30日, 陳天錫編『戴季陶先生文存』第2巻, 中国国民党中央委員会, 1959年, 485頁。
- (9) 戴季陶講演, 陽春暄記「総理行誼演講詞」1942年1月19日『戴季陶先生文存』三統編, 中国国民党中央委員会党史史料編纂委員会, 1971年, 120, 139頁。中国第二歴史檔案館編『蔣介石年譜初稿』檔案出版社, 1992年, 14～16頁。前掲『戴季陶伝』12頁。久保純太郎「戴季陶における『中国革命』とその思想——中国・日本・アジアをめぐる」神戸大学大学院文化科学研究科博士論文, 2005年, 11～12頁。
- (10) 黄自進主編『蔣中正先生留日学習実録』財団法人中正文教基金会, 2001年, 917～918頁。翁有為・趙文遠等著『蔣介石与日本の恩恩怨怨』人民出版社, 2008年, 15～19頁。
- (11) 清末留日学生に関しては, 数多くの先行研究があり, 特に実藤恵秀『中国人日本留学史』増補版, くろしお出版, 1981年, 黄福慶『清末留日学生』中央研究院近代史研究所, 1975年, が既に明らかにしている。ここでは, 戴の留学状況を把握する目的で, それらの研究を参照しながら当時の留学状況を簡単に述べることにとどまる。
- (12) 前掲『中国人日本留学史』79, 80, 83頁。戴季陶の日本大学の同級生である謝健は, 6年間の日本留学の間, 大清国鉄道予備学堂, 日本警監学校, 清国留学生会館の日本語科, 法政大学法政速成科及び日本大学法律科という5種類の学校に入り, それぞれ取得した卒業証書を部屋に飾って, その多さを示した。謝健『謝鏄陳回憶録』文海出版社, 1973年, 22頁。原文では, 最後の学校は「日本東京大学」と記しているが, 同書23頁には, 日本大学法律科に在学した時のことを詳しく述べ, 東京大学について触れていないことから, 「日本大学」の誤りだと思われる。
- (13) 以下, 戴の日本語学習についての記述は前掲「余之読書記」544, 548～549頁による。
- (14) 戴天仇(季陶——引用者)「国家精神より見たる支那」『国家及国家学』第2巻第5号, 1914年, 37頁。
- (15) 前掲『戴季陶先生文存』第1巻, 「謝序」1頁。当時の戴の文章は筆者もいまだ見つけられていない。今後の課題として引き続き調査していきたい。「散紅生」というペンネームは, 戴が「東海散士」と「尾崎紅葉」が好きなので取ったのだという(徐鰲潤「戴伝賢対『民族國際』的推行與貢獻」『第一屆民国史專題討論文集』国史館, 1992年, 250頁)。
- (16) 宋教仁『宋教仁日記』湖南人民出版社, 1980年, 33, 41, 60頁。周作人「学日語」『知堂回想録』上冊, 三育図書文具公司, 1970年, 193頁。
- (17) 『学部奏諮輯要』第一編所載「限定遊学弁法」, 前掲『中国人日本留学史』87頁。
- (18) 『日本大学九十年史』上巻, 日本大学, 1982年, 217, 295, 297頁。作道好男・江藤武人編『日本大学創基八十五年』財界評論新社, 1977年, 135, 137, 138頁。『日本大学七十年略史』日本大学, 1959年, 113頁。なお, 日本大学史に関する資料の一部は小島淑男氏より提供を受けた。
- (19) 楊子鴻は湖南省長沙出身であり, 名は禧である(前掲『謝鏄陳回憶録』21, 25, 28頁)。
- (20) 興亜院政務部『日本留学中華民国人名調』興亜院, 1940年, 579, 581頁。前掲『謝鏄陳回憶録』28頁。『会員名簿』上, 日本大学学友会, 1942年, 51～52頁。
- (21) 前掲『日本大学九十年史』上巻, 300, 316, 317頁。
- (22) 同上, 301, 306, 307, 316, 317頁。

- (25)前掲『日本大学創基八十五年』139～141頁。
- (24)これは謝健の回顧によると、日本大学での授業は毎晩3、4時間であり、合計3年間であったことと一致している(前掲『謝鑄陳回憶録』24頁)。
- (25)前掲『日本大学創基八十五年』140頁。
- (26)前掲『日本大学九十年史』上巻, 317頁。
- (27)同上, 140～142頁。
- (28)同上, 147頁。
- (29)日本大学専門部法律科担任講師の一覧の詳細は前掲『日本大学九十年史』上巻, 354～356頁, を参照。
- (30)笈克彦に関する先行研究としては、竹田稔和「笈克彦の国家論」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』第10号, 2000年11月, 李曉東「立憲政治與国民資格——笈克彦対『民報』與『新民叢報』論戰的影響」香港中文大学・中国文化研究所『二十一世紀』総第98期, 2006年12月号, などがある。前者は、笈が1912年に「君主主体説」を唱えた上杉慎吉と「君主機関説」を唱えた美濃部達吉の論争を周旋し、普遍性をもった国家観を提示し、両説を融合しようとしたことを分析したものである。笈の国家論の構造と本質は、等置された「普遍我」「本来の一心同体」「大生命」であるという。後者は、笈の国法学理論が1905年の『民報』と『新民叢報』による立憲に関する論争に如何に影響を与えたかを検証したものである。
- (31)前掲「立憲政治與国民資格——笈克彦対『民報』與『新民叢報』論戰的影響」51, 55頁。
- (32)大戦中は「大政翼賛」「八紘一字」を講じた。死去に際し政府は勲一等旭日大綬章を贈った。主な著作に、『憲法』(日本大学, 1908年), 『法学通論』(日本大学, 1910年), 『仏教哲理』(有斐閣, 1911年), 『古神道大義』(清水書店, 1912年), 『国家之研究』(清水書店, 1913年)『皇国神典至要抄』(清水書店, 1918年), 『神ながらの道』(内務省神社局, 1926年)などがある。
- (33)戴季陶『日本論』民智書局, 1928年, 5～6頁。
- (34)同上, 5～7, 13～14頁。
- (35)前掲「国家精神より見たる支那」38～43頁。
- (36)「戴季陶小伝」唐文権・桑兵編『戴季陶集』華中師範大学出版社, 1990年, 17頁によると、戴は「法学通論」も著したが、未発見である。
- (37)前掲『戴季陶辛亥文集』20～25頁, 39～46頁。
- (38)戴季陶「致蒋介石先生書」1921年1月14日, 前掲『戴季陶先生文存』第4巻, 1481頁。
- (39)陳天錫『増訂戴季陶先生編年伝記』中華民国中山學術文化基金董事会, 1967年再版, 104頁。
- (40)謝健「戴季陶先生逝世二週年紀念献詞」, 前掲『戴季陶先生文存』三續編, 290頁。
- (41)前掲『国民党理論家戴季陶』27～28頁。
- (42)前掲『日本大学創基八十五年』138頁。
- (43)前掲『日本大学九十年史』366頁。
- (44)前掲『日本大学創基八十五年』142頁。
- (45)前掲『謝鑄陳回憶録』28頁。
- (46)前掲『宋教仁日記』75, 118頁。
- (47)前掲『謝鑄陳回憶録』25頁。また、前掲「戴伝賢対『民族國際』的推行與貢獻」249～250, 280頁によると、戴は闕名という名で「仇一姓不仇一族論」「予備立憲之滿州」(——筆者)を中国同盟会の機関紙『民報』第19号(1908年2月25日)に投稿した。さらに、戴は第17号(1907年10月25日)に「不共天」という変名で7元, 「西川漢史」で7元, 第24号(1908年10月10日)に名誉賛成員(50元以上を寄付した人)として「我亦漢民」で2元, 計16元を『民報』に寄付した。当時の『民報』1部の定価は2角である(民報報館編『民報』第17号, 19号, 24号, 中華書局, 2006年, 影印版, 161, 2669, 3085～3098, 3718頁。ただし、他の傍証はない)。
- (48)王用賓は1911年に卒業し、留日中は学生運動に携わった。例えば、1909年8月14日, 清国留学生会館で明治大学の邵修文と共に、安奉線敷設問題について国民連合会の名義で反対運動を行

い、日貨排斥を唱えた。詳細は「在本邦清国留学生関係雑纂・乙秘第1900号、1903号」外交史料館所蔵、を参照。以後、彼は何度も同盟会山西支部長に選ばれ、太原の『晋陽公報』編集長、国民党中央執行委員会委員、公務員懲戒委員会委員長等の重要な職務を担当した。1928年以後考試院院長となった戴季陶は、1930～1934年に王を考選委員会副委員長、委員長に推薦した（肖如平『国民政府考試院研究』社会科学文献出版社、2008年、78頁。王は日中戦争期に重慶で病死した）。

(49)前掲「総理行誼演講詞」118頁。

(50)戴季陶「愛之真理」前掲『戴季陶辛亥文集』下冊、1490頁。

(51)前掲『謝鏐陳回憶録』26頁。

(52)裴京漢「三均主義与三民主義」中国社会科学院近代史研究所編『中華民國史研究三十年（1972～2002）』下巻、社会科学文献出版社、2008年、1125～1126頁。裴京漢『從韓國看の中華民國史』社会科学出版社、2004年、64～69頁を参照。

(53)戴季陶「天仇叢話」前掲『戴季陶辛亥文集』下冊、730頁。

(54)同上、730頁。

(55)謝健は李公主の名を記憶していないことが遺憾だという（前掲『謝鏐陳回憶録』26頁）。一方、戴は韓王の女婿、錦陵尉である朴泳孝の信頼を得て、「小公主」（母親は永恵翁主である）と恋愛・結婚したという（前掲「戴伝賢対『民族国際』的推行與貢獻」256頁）。しかし、永恵翁主（1859～1872年7月4日）は哲宗の王女であり、1872年4月に朴泳孝と結婚したが、わずか3ヶ月後に亡くなったので、「小公主」の母親が永恵翁主である可能性はない。また、朴泳孝（1861～1939年）は朝鮮半島の近代化を目指した開化派の政治家であり、韓国では日本の侵略を助けた政治家としての悪評が付きまっていた。1882年と1884年に2度日本に亡命したことがあ

るが、1886年に長崎で李という韓国女性との間で一人娘の朴妙玉ができた。妙玉は1899年まで長崎で過ごし、1899年10月に朴泳孝と共に神戸へ行き、1901年4月～1907年6月まで、神戸の親和女学校に在学し、同校の初めての外国人卒業生であった。1907年6月末に特赦された朴泳孝と帰国した。1907年9月に父親が済州島へ流刑されたのに同行し、1年の刑となったので、父より少し早く1908年8月にソウルに戻った（姜健栄『開化派リーダーたちの日本亡命——金玉均・朴泳孝・徐載弼の足跡を辿る』朱鳥社、2006年、168～170頁）。戴が帰国した1909年まで二人は再び来日していないようである。従って、1908年から1909年までの間に東京で戴季陶と知り合った可能性はないと思われる。李公主の出身については、引き続き調査していきたい。

(56)戴季陶「革命的知識與革命的工作講辭」1926年11月～1927年2月、『革命先烈先進詩文選集』第4冊『戴伝賢選集』中華民國各界紀念国父百年誕辰籌備委員会、1965年、527頁。

(57)戴季陶「復駐日蔣公使書」前掲『戴季陶先生文存』第4巻、1540頁。

(58)これについては、前掲「辛亥期における戴季陶の日本認識（1909～1912年）」を参照。

(59)胡春恵『韓国独立運動在中国』中華民國史料研究中心、1976年、39頁。

(60)戴季陶「日韓合邦与中国之關係」『中外日報』1910年8月5日、前掲『戴季陶辛亥文集』上冊、30～32頁。